

## 三重大学ベトナムフィールドスタディ 2020 の 実施と今後の展望

松岡知津子・奥田久春・Cao Le Dung Chi・Le Thi Hong Nga

### Mie University Vietnam Field Study 2020 Performance and Future Prospects

MATSUOKA Chizuko, OKUDA Hisaharu, CAO Le Dung Chi, LE Thi Hong Nga

#### 〈Abstract〉

This implementation report describes the implementation details of the "Mie University Vietnam Field Study", pursued by Mie University for many years, as it became a field study conducted online because of the COVID 19. While there are experiences that cannot be captured without visiting and interviewing in person, the before and after surveys of Mie University students and Ho Chi Minh City Pedagogical University students and the reports of Mie University students suggest that online communication does have some good aspects, such as nurturing in the Japanese students the awareness of the need to communicate to others in an easy manner to understand and the feeling of rediscovering the goodness of Japan.

キーワード：フィールドスタディ、オンライン交流、国際共修、新型コロナウイルス感染症

#### 1. はじめに

これまで、三重大学とホーチミン市師範大学では三重大学生がホーチミン市師範大学を訪問し、学生同士で協働してフィールド調査を行うという「三重大学ベトナムフィールドスタディ（以下、VFS と呼ぶ）」を継続して行ってきた（吉井 2011、長縄 2015）。近年は、春期休暇中の 2 月末から 3 月中旬ごろまでに 1 週間～10 日程度行うことが多かったが、2019 年度は新型コロナウイルス感染症の拡大により、直前になって訪問中止を余儀なくされた。2020 年度に入っても、学生募集の段階では状況ははっきりと見えておらず、現地を訪問して行う形の交流が叶うかどうかは未知数であった。最終的には、状況は好転することなく、訪問は断念することとなった。しかし、前年度とは異なり、訪問中止となる可能性も視野に入れていたことから、2020 年度は、zoom によるオンライン交流に切り替えることとした。それに伴い、期間を 5 日間と短縮して交流の方法や内容を調整した上で交流活動を行った。参加者は、三重大学生が 4 名で、ホーチミン市師範大学生が 9 名の合計 13 名であった。

以下では、まず、本プログラムの目的と準備状況、実施概要について述べる。次に、事前および事後アンケートから参加学生たちの意識についてみていく。そして、今後、本プログラムをどのように展開していくことができるのかについて考えていきたい。

本プログラムの目的は、「協定大学であるホーチミン市師範大学での授業や学生交流、フィールドスタディ、ホームスティの経験を通して、グローバルな視点や国際感覚を持ちながら主体的に行動し、参加メンバーと協力しながら活動を進め、また異文化にあって積極的にコミュニケーションを図ろうとするグローバル人材に求められる能力・資質を育成する」としている。特に全ての活動がホーチミン市師範大学の学生とともに行う国際共修を特徴としている。国際共修とは、言語や文化背景の異なる学習者同士が意味ある交流（meaningful interaction）を通して多様な考え方を共有・理解・受容し、自己を再解釈する中で新しい価値観を創造する学習体験である（米澤 2019）。ホーチミン市師範大学では、近年、ホーチミン市郊外やそれ以外の地域からの学生が増えてきており、ホーチミン市内から通う学生が減ってきたという事情から、ここ数年はホームスティは実施されていないが、その他の交流は活発に行われてきた。これまでの参加学生は、ベトナムを直接訪問していたことから、否が応でも「異文化に身を置く」状況が作られてきていた。すなわち、中心の活動であるフィールド調査以外にも、史跡訪問や現地での毎回の食事、天候といった全ての要素が異文化体験となっていたわけだが、オンラインでの実施となると、三重大学生は自宅の自室から参加することになり、それだけで異文化体験ができるということとはなくなる。そこで、できるだけ限られた時間で様々な体験や国際共修ができるよう工夫する必要があると考えた。次節では、まず、どのように VFS 2020 の事前準備を進めていったかについて述べていく。

## 2. 事前準備

前節で述べた通り、2020 年度に実施した VFS 2020 では、当初現地への派遣も考慮に入れていた。2020 年 10 月 12 日に行ったオンラインによる事前説明会の段階では、派遣の可能性あることを伝えており、参加者は 30 名程度と、関心の高さがうかがえた。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の状況は悪化していき、最終的には 4 名の参加者にとどまった。

以下では、オンラインによる VFS 2020 に向けた事前研修会について簡単にまとめる。これらの研修会はすべて zoom で行った。

表 1 VFS 2020 の事前研修会

	日時	事前研修会の内容
第 1 回	11 月 25 日 (水) 12:10～12:50	参加者自己紹介、概要説明およびプログラムの確認、VFS 2020 の日程調整、日本文化紹介のテーマに関する説明、JASSO 奨学金の説明、海外渡航に関する説明、以降の事前研修会の日程調整、事前学習に関する分担決定（歴史、農業・気候、生活風習・食文化）、フィールド調査の大まかなテーマ決定（「農業」「教育」）
第 2 回	12 月 7 日 (月) 12:10～12:50	コミュニケーションで日本語がうまく通じない場合の注意点についての講義（教員作成のビデオ教材）、ベトナム語学習①（自己紹介）
第 3 回	12 月 21 日 (月) 12:10～12:50	ベトナム語学習②（声調、発音、数字等）、日本文化紹介に関するテーマの検討、学生による「ベトナムの歴史」の発表、新型コロナウイルス感染症拡大により、渡航中止の発表
第 4 回	1 月 7 日 (月) 12:10～12:50	ベトナム語学習③（タクシーの乗り方、道の尋ね方、レストランでの注文方法、ベトナムの食べ物）、学生による「ベトナムの農業」についての発表、オンラインで VFS 2020 を開催する旨の報告と参加意志確認
第 5 回	1 月 18 日 (月) 12:10～12:50	学生による「ベトナムの生活風習・食文化」についての発表、開講式、閉講式の司会等の役割決め
第 6 回	2 月 10 日 (水) 12:10～12:50	オンラインによる VFS 2020 のプログラム（案）の内容・日程確認、オンライン交流に関する疑問や不安な点などへの対応
第 7 回	2 月 17 日 (水) 12:10～12:50	ホーチミン市師範大学の概要、過去の VFS の報告書からどのような学生交流が可能か、フィールド調査についての話し合いの進め方の説明および相談
第 8 回	3 月 3 日 (水) 12:10～12:50	最終日程の確認、VFS 2020 の準備方法の相談

過去の VFS、すなわちコロナ禍以前には、ある程度まとまって時間が確保できる夕方に集中して 5 回程度行っていたが、今回は学生の都合等も考慮し、昼休みを利用して行うこととした。また、表 1 から分かる通り、第 3 回の研修会が始まる前の 12 月中旬ごろまでは、渡航できる可能性が残されており、それを前提に準備を進めていた。しかし、状況が好転しないことから、オンライン交流に切り替え、第 4 回事前研修会にはオンライン交流に対する学生の意思確認を行った。

### 3. 「VFS 2020」の概要

本節では、オンラインによる VFS 2020 のそれぞれの活動についてみていく。表 2 を参照されたい。

表 2 三重大学 VFS 2020 の主なスケジュール

		日程・時間	内容
1 日目	3 月 8 日 (月)	14:00～14:30 15:00～17:00	開講式 フィールド調査
2 日目	3 月 9 日 (火)	14:00～14:30 15:00～17:00	日本語・ベトナム語の教え合い① フィールド調査
3 日目	3 月 10 日 (水)	14:00～14:30 15:00～17:00	日本語・ベトナム語の教え合い② フィールド調査
4 日目	3 月 11 日 (木)	14:00～14:30 15:00～17:00	大学生活についての意見交換 フィールド調査
5 日目	3 月 12 日 (金)	11:00～13:30	三重大学生による日本文化紹介 最終発表会 (15 分+10 分質疑応答)、修了式

主な活動は、(1) フィールド調査、(2) 日本語・ベトナム語の教え合いおよび意見交換 (3) 日本文化紹介であった。(1) および (2) については、三重大学生とホーチミン師範大学生でそれぞれグループを決め、zoom のブレイクアウト機能を用いてグループごとに活動した。三重大学教員がホストとなり、一度全体で集まったあと、各グループに分かれた。インターネット環境等の事情により、途切れてしまった場合に備えて、教員はコンピューターの前で常に待機していた。(3) については、三重大学生があらかじめ準備しておいた発表を PPT 形式で行った。これら以外の活動にも、(4) 両学学生たちの昼食の様子や住環境紹介、ホーチミン市師範大学生による歌の披露なども随時行われた。以下では、各項目について、さらに詳しく見ていこう。

### 3. 1 フィールド調査

今回の参加者は 4 名であり、大きく「農業」と「教育」の 2 グループに分かれてフィールド調査を行った。過去の VFS では、医療や農業、教育などについて現地調査することが多かった。しかし、今回はオンラインによる調査であることから、あるテーマについて日本とベトナムの比較をするよう、初めから設定した。三重大学生 2 名とホーチミン市師範大学生 4 名または 5 名で 1 つのグループを作り、1 日目に初めて顔合わせをした。この活動が、本プログラムの中で最も時間をかけて行った部分である。5 日間で、テーマを絞るところから発表の分担を決めるところまでのすべてを行ったわけであるが、ある時は VFS の時間以外にもやり取りをしながら作業を進めたとのことであった。また、過去の VFS は現地に泊まり込みで実施しており、夕方以降も学生同士の調整が可能であったが、今回はオンラインということもあり、時間も限られていたため、進捗状況を報告し、翌日

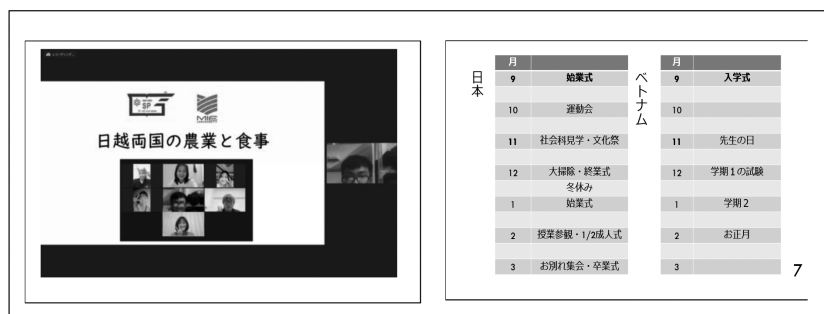


図1「農業グループ」と「教育グループ」の発表の様子

どのように進めていくかなどを随時報告してもらうこととした。

学生同士の通信環境は必ずしも良かったとは言えず、何度も接続が切れてしまうなど、コミュニケーション上の問題が少なくなかった。ホーチミン市師範大学生にとっては外国語となる日本語でコミュニケーションをすることになるわけであるが、通信環境の問題等から、対面で行うよりもずっと難しい状況であった。しかし、5節で述べる通り、お互いにチャット機能を用いたり、ホーチミン市師範大学生が理解しやすいよう、分かりやすい表現を使うように意識したりするなど、いかにして相手に伝えていくかということを学んだというコメントが多かった。これは、過去のVFSの報告書にはあまり見られないものである。これまでは、ホーチミン市師範大学生が熱心に日本語で交流してくれたことへの感動や感謝の言葉が多かったが、今回は、三重大学生自らが工夫していたとのことであった。

### 3. 2 日本語・ベトナム語の教え合いおよび大学生活についての意見交換

日本語・ベトナム語の教え合いおよびディスカッションは、zoomのブレイクアウト機能を使用して、上記調査とは異なる小グループを毎回作成し、行った。初回は自己紹介も兼ねて「日本語とベトナム語の挨拶」を行った。三重大学生は、事前に三重大大学に在籍するベトナム人留学生から3回のベトナム語講座（いずれもオンライン）を受けており、簡単な挨拶程度は学んでいた。ホーチミン市師範大学の学生は、1年生から3年生までの日本語専門の学生たちであり、レベルの差こそあるが、皆日本語が話せる。翌日は、前日とは異なるグループを作成し、「日本語とベトナム語のことわざとオノマトペ」についてそれぞれ紹介した。そして4日目の大学生活についての意見交換では、学生同士の交流が進んでおり、打ち解けてきたことを踏まえて、「大学生のアルバイト」について、両国の状況を紹介し合ったり意見を述べ合ったりした。

これまでのベトナムフィールドスタディでは、フィールド調査の合間に共に食事をした

りするうちに自然と互いについて学び合い、意見交換する場が作られていたのだが、オンラインでフィールド調査を行うことになると、そのような時間が確保できないと考えた。また、フィールド調査のグループのメンバー以外とも交流できる場を設ける目的で、このような時間を設けることとした。

### 3. 3 日本文化紹介

日本文化紹介の活動は、過去の VFS でも行ってきた。VFS 2020 では、三重大学生がそれぞれ事前に準備した PPT 資料を画面共有しながら、全体で行った。テーマは三重大学生が各自選んだものであり、「日本のだし」「和菓子」「年中行事」「三重の方言」であった。この文化紹介は、ホーチミン市師範大学生のために作成したものであるが、5 節でも述べる通り、三重大学生自身にとっても日本について改めて考え直すきっかけとなったようである。

### 3. 4 その他の活動

ベトナムを訪問していれば自然と目にしたり体験したりすることになった食事や住環境について、疑似体験ができるよう、フィールド調査の合間等にお互いの食事や住んでいる地域の写真等を共有するようにした。また、修了式では、ホーチミン市師範大学生による歌の披露も行われた。三重大学生からは、学生の出身地をスライドで紹介した。インターネット接続の問題により、うまく音楽が流れないなどのトラブルもあったが、それまでの 4 日間で学生同士の交流が深まっていることもあり、温かいムードの中行うことができた。修了式には、プログラム参加者以外にも、ホーチミン市師範大学教員やプログラム参加以外の学生、三重大学教職員など 70 名近くが参加した。そして最後に、三重大学国際交流センター長（当時）からそれぞれの学生に修了証が授与され、ホーチミン市師範大学日本語部長と三重大学国際交流センター長（同）の挨拶でしめくくられた。

## 4. アンケート調査の結果

本プログラムを実施するにあたり、三重大学生には事前と事後に、ホーチミン市師範大学生には事後にアンケート調査を行った。ホーチミン市師範大学生に事前アンケートが実施できなかった理由は、新型コロナウイルス感染症によってホーチミン市師範大学生の学生募集が困難だったからである。そのため、例えば、大学から参加するのか、故郷から参加するのかなど、どのような形でオンライン交流ができるかについて、手探り状態であった。そこで、ホーチミン市師範大学生向けの事後アンケートには、三重大学生に行った事前アンケー



トの質問も取り入れるなど、できるだけ両学学生に同じ項目について聞けるようにした。以下では、4.1 で三重大学生に対するアンケート結果を、4.2 でホーチミン市師範大学生に対するアンケート結果を見ていく。

#### 4. 1 三重大学生に対するアンケート調査の結果

ベトナム訪問中止がとなり、オンライン交流が決定した時点で、まず事前アンケートを実施した。質問は全部で5問であり、Moodle 3.5 を使用して行った。回答に字数制限等は設けず、自由に記述してもらったこととした。事前アンケートの質問項目は以下の通りである。

表3 三重大学生に実施した事前アンケート

質問	質問内容
1	実際にベトナムに行かなくても学ぶことができると思うことは何ですか。どうしてですか。
2	実際にベトナムに行かなければ学ぶことができないと思うことはなんですか。どうしてですか。
3	対面で交流できないことを踏まえて、どのような交流が可能だと思いますか。
4	対面で交流ができないことを踏まえて、どんなことに気を付けたいと考えていますか。
5	そのほか、今回のプログラムに期待することがあれば書いてください。

上記の質問について、紙幅の都合から、質問1～4について簡単に取り上げることとする。まず、質問1については、「ベトナムの言葉や歴史などの文字のみ、音声のみでもある程度理解できるもの」や「ベトナムの印象など」、「ベトナムの学生がどのようにオンラインで物事を進めていくのか」「ベトナムの農産物、輸出入品」などの回答があった。質問2については、「ベトナムの国の文化や暮らし」「その国の文化、習慣や人々の物事の捉え方など」「その国の雰囲気や観光地など」「食生活」などの回答が見られた。これらの質問をしたのは、オンラインで交流するにあたり、オンラインでできること、できないことを事前に自分なりに意識してもらいたかったからである。これらの質問を踏まえ、質問3ではオンラインでどのような交流が可能かについて問うた。それについては「動画やスライドを効果的に使う」「映像に撮って見せあう」「zoomの共有機能を用いる」「ビデオ通話などで実際の生活の様子を見せる」といった回答があった。続いて、質問4では、オンライン交流の注意点についての考えを述べてもらったところ、「画面が小さく、表情が見づらいために間違えて理解する可能性があるため、要所要所で確認を取りたい」「なるべく相手の性格や言動に気を付け、相手に配慮した言動を心がけたい」「オンラインでうま

く会話がかみ合わないこともあると思うので、話し方や反応はしっかり意識したい」「言葉が通じにくいことが多くなると思うので、丁寧に会話したい」といった、相手に配慮したいという回答が多くみられた。事前にこのような質問をすることで、三重大学生の意識を知ることができたと同時に、自分たちなりに、オンライン交流でどのようなことが可能かあらかじめ考えておいてもらうこともできたのではないかと考える。

次に、事後アンケートを見てみよう。事後アンケートでは、以下のような質問をした。

表 4 三重大学生に実施した事後アンケート

質問	質問内容
1	プログラムに参加してみて、参加前の不安や期待はあなたの予想と同じでしたか。
2	対面で交流できませんでした、どのような交流が可能でしたか。
3	対面で交流できなかったことを踏まえて、どんなことに気を付けましたか。
4	今回のプログラムで特に印象に残っている活動は何ですか。どうしてですか。
5	プログラムの中で、難しかったことはどんなことですか。そのとき、どのように対処しましたか。

質問 1 については、オンライン交流について、通信状況の悪さ等から「コミュニケーションがとりづらいことがあった」という回答があったが、コミュニケーションそのものについては、ホーチミン市師範大学生の日本語力が高く、問題なかったと答えた人が多かった。続いて、質問 2 については、「映像とテキストを併用した交流」「言語を教え合う交流」といった回答があり、現地を訪問することには及ばずとも、オンラインでもある程度の交流が可能であると考えた人が多かった。また、質問 3 については、オンラインで言葉や言いたいことが伝わりにくい状況を克服するために、ホーチミン市師範大学に対して「少しオーバー気味にリアクションを取り、小さい画面でも意思疎通を取りやすいようにした」、「言葉をとても簡単にゆっくりと話すようにした」といった、表現に気を遣ったという回答があった。質問 4 については、「ことわざを教え合う時間」「フィールド調査」「最終発表会」と様々であった。質問 5 については、通信状況の難しさ以外に、「フィールド調査の発表の仕方をどのように組んでいくかを決めること」、「自分の伝えたいイメージを正しく伝えること」といった回答があった。

これらの回答は、当然のことながら、実際にベトナムを訪問していたら全く違ったものになっていたと考えられる。これまでの VFS では、現地で直接体験することが強く印象に残るためか、コミュニケーションそのものについては、ホーチミン市師範大学生の日本語力に対する感動の方が大きく、たとえ工夫や苦勞していたとしても、印象に残っていな



いようであった。しかし、今回は現地での体験がないため、よりコミュニケーションそのものに焦点が当たりやすかったと考えられる。

#### 4. 2 ホーチミン市師範大学生に対するアンケート結果

前述した通り、ホーチミン市師範大学生には事前アンケートを実施することができなかったため、事後アンケートのみを実施した。ただし、三重大学生に対して実施した事前アンケートの内容も含めるようにし、プログラム参加前と参加後の違いについても書いてもらうことにした。質問はすべて日本語で行ったが、回答は日本語でもベトナム語でもよいこととした。アンケートは、Eメールで送付し、記入後、メールで返信してもらった。

質問2については、オンラインという形式への不安の他、日本人と初めて交流すること

表5 ホーチミン市師範大学生に実施した事後アンケート内容

質問	質問内容
1	あなたはこのプログラムに何日間参加しましたか。1つ選んで○を付けてください。 3日間 ( ) 5日間 ( )
2	プログラムに参加する前、どんな不安・心配なことがありましたか。
3	プログラムに参加する前、どんなことを期待していました(楽しみにしていました)か。
4	プログラムに参加してみて、参加前の不安や期待はどのくらいあなたの予想と同じでしたか。
5	対面で交流するのとオンラインで交流するのはどんな点が違うと思いますか。
6	対面で交流できませんでした、どのような交流が可能でしたか。
7	対面で交流できなかったことを踏まえて、どんなことに気を付けましたか。
8	今回のプログラムで、特に印象に残っている活動は何ですか。どうしてですか。 ( ) ベトナム語と日本語の教え合い、意見交換(両言語の挨拶や自己紹介、ことわざ、オノマトペ、大学生のバイトについて) ( ) 日本とベトナムの食べ物や生活の紹介 ( ) 日本文化紹介(今回のテーマ:日本のだし、和菓子、年中行事、方言) ( ) 日本やベトナムの歌などの紹介(今回のプログラムの最後に両大学が発表したものです)
9	プログラムの中で、難しかったことはどんなことですか。その時どのように対処しましたか。
10	このプログラムに参加して、どのようなことを学びましたか。どんなことでもいいので、具体的に書いてください。
11	自分や参加者全体のオンラインの環境はどうでしたか。オンラインの環境がコミュニケーションにどんな影響を与えましたか。
12	その他、今回のプログラムについて感じたこと、考えたことを書いてください。

への不安、自分の日本語力が不足することによって起こりうる誤解や理解力に対する不安、テーマの難しさに対する不安などが挙げられた。次に質問 3 については、「日本語の練習」「日本事情について理解できる」といった日本に対する理解への期待の他、「自分の国について日本の学生に紹介したい」と考えていた人がいた。また、日本人の友達を作れることを期待している学生もいた。続いて質問 4 の参加前と参加後の意識の違いについては、「ほぼ予想通り」と答えた人もいたが、大半が「不安が半分には減った」、「優しく話してくれたので不安が解消された」と答えた。質問 5 の対面とオンライン交流の違いについては、「どちらもスムーズにできたのであまり違いがない」と答えた人もいれば、「オンラインでは対面のようにコミュニケーションができない」と答えた人、「対面のほうが良いが、オンラインでも交流できることが分かった」と答えた人もいた。質問 6 については、SNS などを用いた交流が可能であるという回答が最も多く、Vlog を用いた交流の可能性など具体的なアイデアを提案するものもあった。質問 7 については、「ゆっくり話すようにした」「わからないとき聞き返すようにした」「会話が続くように、クローズドクエスチョンにせず、オープンクエスチョンにした」などであった。これら話し方の工夫についての記述は、三重大学生のアンケートでも同様の回答が見られた。質問 8 については、「ベトナム語と日本語の教え合い、意見交換」を選んだ人が最も多かった。これを選んだ理由については「日本とベトナムに同じ意味のことわざが多くあることを知った」「擬音語擬態語について勉強になった」「両国の大学生のアルバイトの体験をシェアできたので楽しかった」などの回答があった。フィールド調査とは異なるより身近なテーマについて話すことで、気軽に交流できたようであった。続いて質問 9 については、大半の回答が「インターネット環境」と「言語の壁」についてであった。インターネット環境が悪く、音声聞き取りにくい場合には、チャット機能などを駆使したこと、日本語が理解できない場合には三重大学生に繰り返してもらおうようお願いしたり、必要に応じて聞き飛ばしたりしたという回答があった。

質問 10 ではプログラムで学んだことについて聞いたが、「日本のことわざ」、「日本の方言」「ベトナムと日本の教育の違い」といった具体的な内容が挙げられた。4.1 で述べた三重大学生に行った事後アンケートの結果と比較すると、三重大学生はコミュニケーションの取り方に重点を置いていたのに対し、ホーチミン市師範大学生は具体的な学習内容について述べていたことが分かる。

## 5. VFS 2020 報告書に見る学生の気づき

これまで、事前アンケート及び事後アンケートの回答を見てきたが、本節では、三重大学生が作成した VFS 2020 報告書に見られる全体の感想を通して学生の気づきを見ていき、今後の VFS のあり方について考えていきたい。

ベトナム学生や私の接続状況が悪い場面が多々あり、会話が困難でした。また、日本語で上手く表現できない場合に、身振り手振りで表現しようとしても、なかなかオンラインの画面上でそれを表現することが困難である場合もあり苦労しました。しかし、全体的にベトナム学生の日本語能力の高さに驚き、通信環境等を考えなければ、会話（議論）をする上で特に支障はありませんでした。私が英語などの外国語で今回のような議論ができるかといわれれば、自信がないため、刺激をうけ、今後挑戦してみたいと思いました。

<中略>留学生と話している時感じますが、それぞれの学生がそれぞれ自分自身の考えを持っており、自分が違うと思った場合には、「違うと思う」や「これはやりたくない」ということをはっきり伝えてくれることです。日本においては多少気に入らない部分があっても、妥協したり、同調したりと自分の意見をはっきり言わない場面もあり、私としてはとても刺激を受けました。（学生 A）

学生 A は、ホーチミン市師範大学生とのコミュニケーションを通して、驚きや刺激を受けたことを述べており、オンラインであっても影響があったことが分かる。

ベトナムフィールドスタディを通して、相手にわかりやすく言葉を伝えることの重要性を学んだ。ベトナムの人たちと話し合っていると、私たちの言葉が難しかったのか、ベトナムの人たち同士で話し合ってから返答があったことや、間違った伝わり方をしたことがあった。そのため、わかっていなさそうな雰囲気があれば、表現を変えて伝えるなどの工夫を行った。難しい言葉の羅列は自分の知性を象徴するものになることもあるが、それで言いたいことが相手に伝わらなければ本末転倒である。相手が理解できる単語を選んで伝えることが大切だと改めて感じた。

<中略>また、オンライン開催ということを残念に思ったが、利点もあると感じた。現地の空気を肌で感じる点やラグが発生する点がデメリットだが、お金をかけずに気軽にベトナム人と関わる点ができた点、日本の様子やベトナムの様子を見せあって、ベトナムの人たちに日本がどんなものか見せることもできた。気軽にお互いの文化の違いを知ることができる点がメリットだったと思う。

このベトナムフィールドスタディは、イレギュラーな点も多かったが、その分臨機応変に対応するという力が身につく、オンラインという場面で工夫していく力も身についたと思う。（学生 B）

学生 B は、相手に理解してもらえらる工夫することや「臨機応変に対応する力」がオンライン交流でも身についたことに触れている。

<前略>私たちの「当たり前」と感じていることも他国の人から見たら、そうでないことも多くあることが分かった。

<中略>この 5 日間を通して多くのことを学ぶことができたと思う。もちろん、フィールド調査を通して日本とベトナムの教育の違いを知ることができたという点もあるが、それ以外にも、オンライン上でも国際交流ができること、日本の当たり前は他国から見た時には当たり前ではないことや、ベトナムの学生から現地の話を聞くことでベトナムの魅力などが分かった。また改めて、自国である日本の魅力も感じることもできた。開催前はオンライン上で開催されることに少なからず抵抗を感じていたが、参加したことで得ることができたものも多くあったので、参加できて良かったと思う。機会があれば、今回オンラインを通して交流したベトナムの学生と実際に会いたいと思う。（学生 C）

学生 C は、VFS を通して日本について見つめ直すことができたことなどオンライン交流について参加したことで得るものも多かったと述べている。

ベトナムフィールドスタディを行っていく中で日本人とベトナムの学生が受け取る言葉の感じ方の違いや、言葉の解釈の違いがベトナムの学生とパワーポイントを作っていく中で感じることもできました。また、それ以外の部分でも日本とベトナムの文化の違いを知ることができました。相手に伝える力、相手を理解する力などが鍛わり、とてもいい経験ができました。

<中略>フィールドスタディを行っていくことで、相手の話をよく聞き理解しようとする力や、相手に理解をさせるために言葉をかみ砕いて分かりやすく説明する力のようなコミュニケーション力が鍛えられるとてもいい経験をすることができました。（学生 D）

学生 D もコミュニケーション力が鍛えられるよい経験となったことを述べている。

これらのように、オンラインで限られた交流とはなったものの、ホーチミン市師範大学と協働し、お互いの文化を伝えあい学び合うという国際共修を通じて学生一人一人がそれぞれに気づきや学びを得ており、自分のこととして捉えていることが分かる。

## 6. おわりに

本稿では、新型コロナウイルスの影響により、オンライン交流に切り替えて行った VFS 2020 の実践について、その準備とプログラムの概要、そして事前および事後アンケート、報告書の感想文に見られる学生の気づきや学びについてみてきた。実際に現地を訪問し、冬の寒い日本とは対照的な現地の熱気を感じつつ直接顔と顔を突き合わせて初めて得られる経験はもちろん貴重であるが、現地訪問が叶わない状況において、また通信環境の問題など限られた条件下で苦勞することによってコミュニケーションの大変さと大切さを改め

て感じるなど、これまでにない経験ができたことは一つの大きな成果であるといえよう。現在、VFS 2021 の実施に向けて事前研修会を行っている最中であるが、前年に続きオンラインによる開催が決定している VFS 2021 では、VFS 2020 とは異なり、募集段階からオンライン交流であることを通知していたこともあり、参加者はここ数年で最多である 15 名に上る。VFS 2021 では、学生からのコメントを生かして、Vlog などでの交流ができるよう三重大学生が三重県各所を訪問し、ビデオ等で紹介することにするなど改良を加えている。また、VFS 2020 では、スケジュールの決定が遅かったこともあり、プログラム 1 日目に初めて学生同士が顔合わせをすることになった。そのため、フィールド調査のテーマについてほとんどゼロの状態から開始することとなっていた。この点については、学生が事前アンケートでも不安に思っていたことが述べてあったが、VFS 2021 では、できるだけそのような不安を解消すべく、また有意義な議論ができるよう、事前に学生同士が連絡を取り合えるような仕組みを作っていきたい。

#### 参考文献

- 1) 奥田久春・松岡知津子 (2020) 「2018 年度三重大学ベトナムフィールドスタディの意義と課題」『国際交流センター紀要』15, pp.81-94.
- 2) 奥田久春・松岡知津子 (2021) 「海外研修の知見を生かした国内での国際共修の可能性：三重大学ベトナムフィールドスタディを事例に」『三重大学高等教育研究』27, pp.85-88.
- 3) 長縄真吾・江原宏 (2015) 「ベトナムでの海外体験学習を通じた参加学生の意識変化ーグローバル人材育成の観点からの一考察ー」『三重大学国際交流センター紀要』10, pp.137-152.
- 4) 吉井美知子 (2011) 「参加型開発教育の実践と考察：三重大学ベトナムフィールドスタディツアーの事例より」『三重大学国際交流センター紀要』6, pp.65-79.
- 5) 米澤由香子 (2019) 「国際共修：開発と発展の背景」末松和子・秋葉裕子・米澤由香子編著『国際共修 文化的多様性を生かした授業実践へのアプローチ』東信堂, pp.4-8.